

対して肝硬変では不变であった。以上、肝硬変における  $K_L$  変加率の増化は経動脈性血流量より経門脈血流量がより関与していることが推定される。

\*

#### 24. $^{65}\text{Zn}$ を用いた正常及び脾尾切除時の脳内亜鉛分布に関する研究

藤井正隆 淵本 悍

(山口大学 徳岡外科)

正常および脾切除時の脳内亜鉛代謝を  $^{65}\text{Zn}$  を用いて検索した。

正常マウスでは、血液または体内貯留  $^{65}\text{Zn}$  が短時間に増加し、時間の経過とともに著しく減少するのに対して、脳内  $^{65}\text{Zn}$  の増加はゆるやかで、およそ 48 時間で最高値を示し、以後漸減している。脳各部位の  $^{65}\text{Zn}$  は 48 時間では有意の差はなく、10日および 30 日目ではアンモン角、歯状回で次第に増加し、間脳や延髄・橋・中脳では減少する。 $^{65}\text{Zn}$  の脳内での化学的結合は非透析性、脂質非溶性がほとんどでたんぱくと結合していると考えられる。しかし亜鉛酵素である炭酸脱水酵素との関係ははっきりしない。脾尾側切除 (3/5 切除) では脳内  $^{65}\text{Zn}$  は 48 時間目に対照群に比して有意の低下を示し体内貯留

$^{65}\text{Zn}$  も低値を示す。脳各部位の  $^{65}\text{Zn}$  分布は、アンモン角、歯状回が脾切除によって特異的影響をうけ、10日および 30 日目ともに有意の低下を示す。これらの所見と脳興奮性との関係について若干の考察を加えた。

\*

#### 25. ラットにおける $^{35}\text{S}$ -glutathione の代謝に関する研究

上原拓也 倉元義人

(鳥取大学 浅越内科)

正常ラットおよび  $\text{CCl}_4$  中毒ラットを用い、100g 当り  $^{35}\text{S}$ -還元グルタチオン 1mg を 0.1cc の生理的食塩水に溶かし、股静脈より静注し、15分、30分、45分、60分と経時に瀉血死させ、肝、腎、血漿、赤血球の 1g あるいは 1cc 当りの  $^{35}\text{S}$  のカウント数を測定し次の結果えた。①  $^{35}\text{S}$ -還元グルタチオンを静注した場合、正常ラットと  $\text{CCl}_4$  中毒ラットの間において、各臓器における  $^{35}\text{S}$  の分布状態に大差はみとめられないが、血漿中よりの消失速度が  $\text{CCl}_4$  中毒ラットのほうがおそい。②還元グルタチオンは大部分腎より排泄される。③注射した還元グルタチオンはほとんど赤血球中へはいらない。

\* \*

\* \*

\*

\* \*

\*